
アオの織姫

八神煌斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アオの織姫

【Nコード】

N3233W

【作者名】

八神煌斗

【あらすじ】

最近幼馴染と疎遠になってきたことを悩む成美育沙は、学校の帰り道に一人の女性と出会う。彼女は何処までも気高く、そして悲しいほど美しかった。

01. プロローグ（前書き）

お久しぶりの方はお久しぶり。初めての方は始めまして。八神煌斗です。

オリジナルは不慣れなため、どうなるか自分でも全く予想できませんが、頑張って行きたいと思います。

それではよろしくお願いします。

01. プロローグ

六月に入ったある日。

その日も特に大きな出来事がある訳でもなかった。

「なあ、欲しいCDあるんだけど……」

「あ、ゴメンね！　今日は無理だ！　じゃね！」

そうして学校指定のカバンを持ち、少し青みのかかった黒髪を揺らしながら教室から駆けていく白奈^{シラナ}　夕輝^{ユウキ}を見送った。
宙に浮いた右手は行方を知らずにただ浮いていたが。

学校の帰り道。

CDショップがある商店街に足を運びながら成美^{ナルミ}　育沙^{イクサ}は首をかしげていた。

つい二ヶ月前に育沙と夕輝は共に自宅から近い皐月^{サツキ}高校の二年に進学した。

その進学の際に夕輝が泣きついて来て二人で夜通し勉強会をしたのはまた記憶に新しい。

けれども、と育沙は思う。

夕輝は元々バカではなかった。とは言え良くも無かったのだが、

進学には問題ない程度の学力はあった筈だった。

記憶を辿れば中学二年の二学期、今から約三年前。足を交通事故で怪我したと言って暫く入院した後、それから徐々に夕輝はバカになっていったのだ。

それに最近は様子もおかしい。

親同士が友人で、家も近いこともあり昔はお互い何も言わずに一緒に帰っていた2人だったが、最近になって声をかけても一緒に帰れる機会がなくなっていった。

特別それがおかしいと、育沙は思わなかった。

お互いに既に高校二年。自分にはまだわからないが夕輝には男女2人で一緒に帰ると言う事に抵抗が出てきたのだろう、と思う。

だがどうしてもそれだけが理由では無いように思えた。

夕輝は学校でも有名な方だ。

肩よりも下まで伸ばしている青みがかかった髪はクセが余りなく、少しでも風が吹けばそれはもう揺れる揺れる。茶色の瞳も大きく、人と話すときは目を見てくるので育沙でも偶に照れるほどだ。

それに性格にも拍車をかけていた。

歯に絹をきせない物言い。始めは皆から煙たがられていたが、持ち前の明るさで今は自然体で話せる相手、相談事で確り意見を言ってくれる相手と言う事で友人は増えていった。

そのお陰で育沙も友達が増えたわけだが。

その夕輝が帰りは一人なのだ。

彼氏や仲のいい友達とかえるなら分かるが態々一人ではば毎日教室から飛び出す理由がわからない。

「ん？」

と、ココまで考えを巡らせていた育沙がふと現実に戻ってくる。

気づけば商店街を通り過ぎ、出口付近に来ていた。

やってしまった、と思う。

この商店街は地味に長い。それにCDショップは調度商店街の真ん中辺り。

またもう一度戻る手間を考えると明日でもいいような気がするが、それでは初回限定版が売り切れているかもしれないと思う。

それほど有名でもないのにこんな心配杞憂だと思うが、それでも不安になるものはなるのだ。

「はあ、仕方ない……か」

頭をガリガリと乱暴にかき、今まで歩いてきた道に戻る。

そういえば、今日買うCDのアーティストは夕輝も好きではなかったか、そんな考えを巡らせて入り口まで歩いてしまったのはまた別の話。

「結局こんな時間か。オカン怒ってんだろなあ。晩飯あると良いけど」

目的のCDを買い店を出るとすでに外は暗くなっていた。

夏に近づいてきているので日の入りが早いわけではないが今は梅雨。

どんよりとした雲が空を覆い、それに伴い外はいつもより早く暗くなっていた。

早く家に帰らなければ一降りくると思い、育沙は近道をして帰ることにした。

自宅と学校の間に大きなものといえば先ほどの商店街と公園がある程度だ。この公園は大きく、中を通ればそれだけで五分は短縮できる。

普段は何となく、公園に沿うように歩いていたのだが、こういう時は走り抜けるに限る。

そう思い公園の調度中ごろに來た時だった。

——世界が一転した。

それは周りの景色が変わったとか、知らない世界になっていたとかではない。

周りの景色は何も変わっていないのだ。

けれども、自分の周りの空気が変わっていた。

こんなの知らない。

頭の中で警報が大きく鳴り響く。育沙の中にあるナニカが逃げろと叫ぶ。

それでも足がすくんで動けない。

息も出来ているのか分からない。声を出そうにも喉に詰まって出てくるのは声にならない声だけ。

こんなの知らない。

そして育沙の前に再び、知らない世界が現れた。

「なん……だよ、コイツ」

やっと出た一言。

だが育沙は自分で発したその一言すら気づけてはいなかった。

育沙の前に立つのは一言で言うなら狼だろう。

しかし、それは見た目でのこと。

大きさは優に軽車両並みの大きさを持ち、その眼光は見るものを全て狩り取ると語っている。爪も発達しているのか、狼が歩いた後には地面を三本の線が出来上がっていた。

しかし、それでも、目を瞑れば狼だろう。
その背にツバサがなければ。

コウモリではなく、鳥の様なツバサ。
今は折りたたまれているが広げれば四、五メートルはあるのでは無いだろうか。

――死ぬ

そんな一言が育沙の頭の中を埋め尽くす。

「ヒッ……」

狼と目が合った刹那、育沙は気づけば背を向けて走り出していた。
その走り方に形もなにもあったものじゃない。

生きる。

ただその為に育沙は走る。出口に向かって。

すべては夢だったのだと、幻想で済ませるために。

しかし、その願いは一陣の風によって無残にも砕け散ることになる。

右腕に痛みを感じ、同時に体制を崩しその場に倒れこむ。

見れば右腕は見たことも無い赤に染められ、熱を放っている。

「あ——が、ああああああああああああ——！！！」

それが切り傷だと認識した瞬間、次に襲い掛かってきたのは痛み。肘から手首の辺りまで綺麗に切れている。

血は止まらずに、制服を赤に染めていく。

痛みに頭がクラクラする。

そんな中、首を動かすと目の前の狼が一步一步ゆっくりと育沙に向かって歩いてくる。その一步が育沙には死が近づいてきていると、朦朧した思考の中で感じ、それは紛れもない事実だった。

一人の乱入者が入ってくるまでは。

01. プロローグ（後書き）

プロローグです。

スイマセン、まさかのヒロイン未出演でした。

次回では出てきますので安心してください。

感想はユーザー登録していなくてもかけるように設定しています。

それでは次話で会いましょう。

ではまた！

02. 青の君

「そこまでえ！」

声が聞こえ、直ぐに銃声が公園内に鳴り響いた。

狼の右肩付近から鮮血が飛び散り、夜の空を舞った。

育沙には何が起こったのか全く分からないでいた。

自分を食い殺そうとしていた狼の方から突然噴出した鮮血。そして耳を劈くような叫び声。

「はい、怪我人は下がってなさい」

この場に似合わない、気の抜けた陽気な声。

後ろを見るとソコに立っていたのは一人の女性だった。全身スツで包んでいるようだが、白に青と少々派手な格好だ。声や体つきで女性と分かるが、スカートではなくズボンを着用している。海色の髪は肩より上で、夜風に揺れている。

深い紫の瞳が育沙を見た。

「右手やられた見たいね。傷一つで済んで取り合えず安心ってとこかしら」

凜として、透き通るような声。

何を言ってるか、混乱した頭には理解が出来ない。それでも、声だけは確りと育沙の頭に、脳みそに刻み込まれた。

育沙の様子を見てまず大丈夫かと判断した女性は狼と育沙の間に移動する。

そこで育沙は気づく。

女性の両太もも。そこに付いているのは白いホルスター。銀色に装飾された二丁の拳銃。

本物なのかどうかなんて分からない。ただ、育沙には彼女にはその二丁の拳銃が恐ろしいほど、そして素晴らしいほど似合うと感じ取った。

「さて、狼系は個人的にキラ^{ウルフ}イじゃないんだけど……」

とても小さな声で、しかしはっきりと聞こえる声で呟き、両手を両ホルダーにもっていく。

その時——拳銃を手にした時に彼女の瞳が人のモノから、狩人の瞳へと変化したことを育沙は知らない。

「襲われてる人を見過ごす訳にもいかないのよ。ゴメンねっ」

可愛く言ったその瞬間、ホルスターから拳銃を抜き取り、狼に向かって発砲する。

その連射速度は拳銃のそれではない。瞬く間に狼の体中から鮮血が舞い散り、飛び散る。

狼の叫び声で体が微かに揺れる。だが女性はそれに構うことなく、狼に向かって駆け出す。

狼も女性を敵とみなしたのか、傷ついた体で、その右前足を振り上げる。

「遅い！」

それでも女性は怯まない。

飛び込む様にその前足の下に跳び込み、攻撃を交わす。同時に狼の背後に立ち再び銃を連射する。

だがそこで止まらない。女性は拳銃の弾を素早く入れ替え高く跳び上がる。

「私の前に出てきたのが運の尽きってことよ」

女性は狼の背中に着地して、そう叫ぶ。
そう、叫んだだけ。

それなのに、狼は頭を激しく揺らすような仕草を取った後、重心がズレ、その場に倒れこんだ。

倒れただけで地面が揺れた。

それだけであの狼がどれだけの重量があつたのか分かる。

女性は軽く狼から跳び下りて拳銃をホルスターに収め、育沙の元に歩み寄る。

「つと、うわ。思いつきやられてるわね」

自己紹介をするでも、育沙の顔を見るでもなく、一番に改めて傷口を見る。けれども育沙には女性が何を言ってるのか聞き取れていない。

今までに経験した事の無い怪我を見たショックと、出血のせいで頭が正常に動いていない。

だがそれ以上に月と星の光を背に浴びている女性に、とても見惚れていた。

「^{コネクト}接触も調べたいし、連れて行くしかない……わよね。自己紹介はその後でいいか。どうせ^{コネクト}接触してなかったら私達と関わることもないんだし」

女性は携帯電話を取り出し、どこかにダイアルする。

「ああ、私。……うん、一人襲われた。一応今から……ああ、分かってるわよ！ 一応って言ってごめんなさい。これでいい？ うん。取り合えず一人コッチによこしてくれない？ さすがに私一人じゃ後処理の引継ぎしながら運ぶ準備は忙しいし」

じゃ、よろしく。と、電話を切りここで初めて育沙の事を見た。その瞳は先ほどまでの狩人の瞳ではなく、ただのどこにでも居るような女性の目が変わっていた。

「応急処置って……私苦手なのよねえ」

この一言が聞こえなかったのは、育沙にとって唯一の幸運だったのかもしれない。

女性がしゃがみ、まずは育沙の腕の状態を見ようとする。だが、女性の腕を育沙がつかんだ。

突然と言う事もあったが、接触の可能性が濃厚な人間が自分の腕を掴むほどの力があると言う事に驚いた。

——この子、もし接触者コネクタになったらそれなりにいくかもね。

なんて考えている時、育沙が口を開いた。

「……頼む、助けてくれ……」

それだけ言い、育沙は崩れ落ちるように意識を手放した。

「何処の誰か分からない相手に助けを請うとはね。いいわ、生き汚いのはキライじゃない」

公園のベンチに移動、手当てをし始めて十数分、人影が2人に近づいてきた。

「スミマセン、アオさん。遅れました」

その人影は白奈夕輝だった。

服装もアオと呼ばれた女性と同じ白と青を基本にしたスーツ。違う箇所といえばズボンではなく膝上のスカートに変わっているだけだろう。

夕輝は息を切らし、肩を上下に揺らしながら女性——アオに話しかける。額に汗の粒をいくつも作っている所を見るだけでもどれだけ急いできたのかが分かる。

「大丈夫よ。一応の処置は終わって今は寝てるだけ。状態も安定してるわ」

「ああ、それならよかつ——って育沙!？」

夕輝はベンチに横になっている育沙を見て大声を上げた。

「なに知り合い？」

「……一応、幼馴染です」

上司の前で取り乱したことが恥ずかしいのか、顔を赤くして答える。

小さな声でなにかブツブツ言っているのもアオには全て聞こえているが気にしない。内容を聞いて顔が緩むのが抑えられていないが。

「照れるのは良いけどさ、さっさと連れて行かないと死ぬかもよ?」

「それです!」

「うわっ。ビックリした……」

育沙の事が話題に出た途端、再び大声を出す夕輝。

もう長い付き合いになるアオだが、さすがにこのタイミングで叫ばれるとは思ってなかったようで耳を押さえる。

良い加減自分の声量を把握して欲しい。

「なんで育沙が怪我なんてしてるんですか！　そもそもその体制は何事かー！ー！！」

「何って……膝枕でしょ」

今の状態はアオが育沙を膝枕している状態。何も知らない人から見れば恋人同士に見えることだろう。
残念ながら男は血だらけで苦しみ、女は拳銃持ちと言う事で色気は何処にもないが。

そんな事夕輝には関係ない。

とにかく2人がそんな状態なことが許せない。どっちに怒りがわいているかは分からないが。

「――ははぁん」

アオの顔が意地悪く歪む。

その表情を見て夕輝はドキリと、心臓が嬉しくない方向に跳ねる。

「何なら変わってあげましょうか？」
「なァ！？」

一步下がろうとして、その場にしりもちをつく夕輝。

「アンタ相変わらず気が抜けたら、倒れるわね」

「アアア、アオさんが変な事言うからでしょうがぁ!!」

夕輝は顔を真っ赤にし、アオを指差す。

もう上司も部下もあったものじゃない。

しかしアオはそんな事気にしない。

元々上下関係は好きでもない。確かに最低限の事は必要だとは思
うが、公の場で無い限りは気軽に気楽にいったらいいと思う。

「ま、アンタが良いって言うなら良いけどね」

「あ……いや、別にそう言う訳じゃなくてですね……」

今度は声が少しずつ小さくなっていく。

まだからかうのも面白そうだが、あんまりグズグズしていると本
当に育沙が危なくなると思ったアオは無視して話を進めることにし
た。

「そろそろ行きましようか。アソコにある荷台持ってきて」

「……分かりました、って、アレですか?」

「そ、アレ」

明らかに話を逸られ釈然としない夕輝だが、アオの言うとおり荷台と言われたものを取りに行こうとする。

そして、動きが止まった。

そう。そこにあるのは荷台なのだ。

間違っていない、アオは確かに荷台と言ったのだから。

だからと言って、学校にあるような二輪の荷台が置いてあるとは思わなかった。

「あの、何で荷台なんですか？アオさん車持っていましたよね？」

「アンタは血の匂いにする車に乗りたい？」

凄くいい笑顔。

けれどもその背後に鬼が見える。

「人間自動に頼ってばかりはダメだと思います！　サー！」

「よろしい」

そっと胸を撫で下ろす夕輝。額には嫌な汗が出てきている。

あのまま逆らっていたら自分も育沙の隣で寝ていただろうという、リアルな妄想を振り払うように顔を左右に振る。

育沙をやっこの思いで荷台に乗せた夕輝。

その間、アオは現場の引継ぎと言って後から来た別の人間に後処理の事を話し合っていた。

さすがに男の子。体重は聞いたことないけれど触った感触で見えないところで鍛えていたのか、自然となったのか判断は出来ないが、重かった。

目が覚めたら取り合えず文句を言ってやろうと心に決めた夕輝。

そして同時に思う。

ココまで来たら育沙と自分の体力を信じるしかない、と。

先ほど触ったとき体がとても熱かった。

その熱が菌を殺すための反応だと願いたい。これがもし接触者への進化……いや、変化だとしたら。
コネクター
そう思うと気が気ではなかった。

よし、と両手で頬を叩く。

「じゃ、アオさん……」

「確り付いて来なさいよ?」

「……はい?」

先程引き継ぎ作業を終えてベンチに座っていたアオを見れば、い

つの間にか荷台の手持ち部分を持って立っていた。

その姿はとてもシュールで普段なら笑いそうになっていただろうが、今はそれ以上に嫌な予感がする。

今アオは何と言ったのか？ 付いて来い、と言わなかったか？

この晩何度目になるかわからない汗をかく夕輝。

「ちょ、まさか能力使うなんてことないですよね？」

「使うに決まってるでしょ？ その方が車より早いんだよ？」

「分かってますけど、私はどうなるんですか？」

まさかこのタイミングで能力を使うと思っていたいなかった夕輝は今にも飛び出しそうなアオを制止させる。

自分が運ばずに済むと言う面で見ればとても嬉しいのだが、能力を使うとなってくると話はまた変わってくる。

今使われたら確実に自分は置いていかれ、再びホームまで走る事になるだろう。その変わり育沙は余裕で助かるのだが、焦っている夕輝はソコまで考えが及ばない。

「ならアンタも使えば良いでしょ？」

「出来るかあ！ 私とアオさんの能力根本から違うでしょう！？」

「でも確か右足よね？」

「それでも片方ですし、そもそも能力使ったら逆に走れなくなり
ますよ！」

夕輝が必死に止める中、アオはどうとう目を閉じ、瞑想に入る。
アオ程になれば瞑想は必要ないのだが、気合を入れるときや余裕があるときはするようにしている。

「はいよおおー！！！！」

「やっぱり話聞いてくれませんか!?」

アオが大声を出すと同時、一瞬で公園から荷台を引き走り出していった。

比喻でも何でもなく、ただ現実はその姿は一瞬で見えなくなった。

そこに残ったのは夕輝一人。

「何でこんな扱いなのよー！！！！」

その雄たけびに後処理作業員は揃って耳を押さえた。

02. 青の君（後書き）

こんにちは、八神煌斗です。

という訳で今回は第二話でした。

育沙よりも女性人の方が喋っているという事実。

本文に色々専門用語を出しましたがそれは次回に説明します。

やはり無知な人間が居るか居ないかで会話の内容も変わってきますね。

それでは次回お会いしましょう。

ではまた！

03. 接触者

「ん……つつ！」

目を覚ますと同時に体、右腕に痛みが走った。

見れば右手には包帯が巻かれていて、コードが三本程延びていた。

一瞬自分の腕からコードが延びて延びていることに驚いたが、回
りを見て安心する。

病院、と言うには少し汚いがどうも病院らしい。見たことのない
機械も多いが、元々大怪我なんてしたことのない育沙はさほど疑問
を持たなかった。

誰がココまで、と思い育沙は思い出す。

得体の知れない翼を持った狼。曇の合間から覗いた月と星の光を
背負った青髪の女性。

彼女がココまで運んだのだろう、と自分の中で自己完結した。

実際その予想は事実なのだが、その裏にある夕輝の苦勞を育沙は
知らない。

と、その時、育沙の居る部屋に大きな警報音と共に機械的な音声
が鳴り響いた。

《負傷者起床、負傷者起床！ 担当員は直ちに病室に来てくだー

↓

「育沙ーーーー！！！」

「うるせえ！？」

耳が壊れるかと思うほどの音声を遮って聞こえてきたのは肉声だった。熱でまだボウツとしている育沙でさえ、つい叫んでしまうほどの。

そして次の瞬間病室の扉が開き、現れたのは白と青のスーツを着た夕輝だった。

「夕輝！？ お前なんで——」

「大丈夫とか傷の具合とかなんであそこに居たとか聞きたいことはいっぱいあるけど取り合えず一発殴らせろ——！！」

「なぜブフォ！？」

早口で何を言っているか分からなかった育沙に、馬乗りになった夕輝の右ストレートかボディに決まった。

「よしっ」

「よし、じゃねえよ！ ただでさえ混乱してるのに、更に混乱させるんじゃないよ！」

満足気に腕を組み頷く夕輝に育沙は怒鳴る。
しかし夕輝はそんな事関係ないと言わんばかりに顔を背ける。こ

ういう時の夕輝は話を聞かない。昔からの付きあいの育沙にはソレくらい分かるので、悔しいがこれ以上言わないことにした。

「じゃれ合うのも良いけど、彼は一応接触者予備軍よ？ あんまり手荒なことしない方が良いんじゃない？」

「予備軍じゃなくてもう彼は立派な接触者だから手荒な事とかは関係ないですね」

「よし、育沙もう一発！」

「何でだよ！？」 取り合えず話くらいは聞かせろよ！？」

青い髪の女性と、赤みがかかった黒髪の女の子が入ってきて更に場は収集がつかなくなる。主に夕輝一人のせいだ。

「そうね。夕輝、暴れるのはまた後でにきなさい」

「……分かりました」

しぶしぶと言った様子で育沙に馬乗りになっていた夕輝はベッドの横まで移動する。それを確認した青い髪の女性、アオと女の子は育沙の元に歩み寄る。

「とりあえず自己紹介しましょうか。私はアオ。よろしく」

「私は水河^{みずかわ} 柚瑠^{ゆずる}。よろしくお願いしましゅ……あう、噛んじやった……」

癒されるなあ、と思うが、足元から酷く睨んでくる人物が居るの
で直ぐに切り替える。

改めて二人を見ると夕輝と同じ格好をしている。とは言っても女の子はスーツのサイズが少し大きいのか全体的に布が余っている。それに拍車をかけるように足首まである白衣を着ていて袖の部分は何度も折っている様だがそれでも指先しか出ておらずに、服を着ているというより服に着られている印象を受ける。

親子だろうか？ それにしては片方は若すぎるし、片方は年を取りすぎているように思う。

「あ、成美 育沙です。出来れば育沙って呼んでください」

「あら。私はソッチの方が気楽で良いけど……積極的ね、いきなり名前なんて」

アオが心底疑問といった感じで聞いてくる。確におかしなことだろうと思う。初対面で自分から名前と呼べと言っているのだ。その様子を見て夕輝が口を開く。

「育沙、苗字が女の子っぽいからイヤらしいんですよ。その考えがまず女々しいですよね」

「お前はなんでいつも女々しい言うかな？」

「細かいこと気にしてるからでしょ」

何か言い返したいのだが、今指摘された事は育沙も少し思うところ

ろがあるので言い返せない。最後の抵抗として睨んで見るが、夕輝は何処吹く風だ。

「で、早速だけど今のキミの状況教えるわね」

二人の会話が終わるまで待っていたらいつまでも待っていないければならなさそうだ、と思ったアオは話題を変える。

とは言ってもアオと柚瑠はその話をする為に育沙の部屋に訪れたのだからこの話題になるのは自然な流れだった。とは言え予定では既に話は終わっていた筈だったのだが。それは夕輝のせいだ、といい、胸に仕舞う。

二人も夕輝に下手なことを言えば面倒だと理解しているからだ。

育沙と夕輝はアオと柚瑠に明らかに冷たい目で見られていることに気づき目をそらす。育沙としては完全に巻き込まれた形であり不満はあるのだが。

「まずキミが出くわしたヤツだけど、私たちは感染獣って呼んでる。因みにアレはウルフタイプね」

「感染、獣……」

アオが言う言葉をかみ締めるように繰り返す。

「感染獣は私達の世界で新化した動物の事。原因は色々あるんだけど、ウイルスによる突然変異くらいに覚えておいてくれたら良いわ」

「？ 今私達の世界って……」

「そ。私はこの世界の人間じゃない。って言っても、場所はココで間違いないんだけどね」

ココだけど、ここじゃ無い世界。その言葉だけ聞けばただの下手糞な創作の世界だ。しかし育沙は現にあの怪物、感染獣を見ているし、傷まで負わされた。それでいて頭ごなしに否定できるわけが無かった。

育沙が何も言わないことを確認したアオは更に話を続けていく。

「ココにあるけどお互いに触れることも、認識することも、ましてや見ることも出来ない。本来私の世界とキミの世界は関わることもく時を重ねていく筈だった」

「けれど、そうもいかなかったんですよ」

アオに続くように柚瑠が言う。

それにアオは頷き、更に言葉を続ける。

「ある日突然孔が開いたの。誰かが開けたのか、それとも自然に開いたのか分からない、大きな孔がいくつも」

「もしかして……？」

「そ。その孔の出口を調べたらこの世界、日本の梶月市に開いていた。感染獣はその孔を通してコチラの世界に来てるって事」

「じゃあ、アンタもその孔を通してコッチに？」

育沙の質問にアオは小さく首を横に振った。

「その孔を私達人間が通る事はできないのよ。えっと……」

「その孔の中には莫大な圧力と、電磁波があるのですよ。本来関わる事の無い世界同士が繋がるんですから当然と言えば当然なのですけれどね」

アオが言葉につまり再び柚瑠が言葉を補足する。アオは細かい事も過程もソレほど気にしない。そのせいで結果だけを覚えるので、今のように人間は孔を通れない。ソレだけを覚えていたのだ。

「通れないって……アオさんはココに居ますよね？ それってどうやって？」

「それは私の居る部隊の技術の賜物って訳よ」

「部隊？」

再び日本に居れば普通は聞かない言葉を聴く。

「アオさんの所属して居る部隊、ベガブルーは独自の技術を進化させてるのです。コッチに来了感染獣を倒すためにM75と言うリング状の転送装置を開発しました。アオさんはソレを通してきたのです」

両手を腰にやり、エッヘンと胸を張る柚瑠。その様子には凄く癒されるのだが、何せ無い。ナニがとは言わないが無い。何となく残念な気持ちになる育沙。

「ま、コッチに私が居る理由はどうでもいいのよ。問題は今のキミの状況よ」

不自然に咳払いをして話し出すアオ。
しかし育沙はそんな事にせず、今アオが言った言葉に食いついた。

「感染獣には傷つけた相手に自分の能力を感染させるのよ。……まあ、あいつ等のバカみたいな増殖力はそのせいなんだけど……」

そこまで言ってアオは小さな声でブツブツ言い始める。
めんどくさいや鬱陶しい、そして少々物騒な言葉聞こえてくる。
しかもソレが断片的に聞こえてくるものだからその恐怖は押して図るべし。

「それは私たち人間にも言える事なの。ここまで言えばアンタでも分かる？」

そんな様子を見かねて夕輝が説明しだす。とは言っても説明ではなく育沙にヒントを与えるだけ。しかし今までの話を総合して考えればそのヒントは答えとソレほど違いは無かった。

「もしかして……俺も」

「そう。アンタも既に感染してるのよ」

その一言で育沙の希望は崩れ去る。

自分があのかの化け物のに感染した。思い出すのはあのおかしな、そして恐怖しか表さない姿。あのような姿になる以前にただただ恐怖が沸いてくる。

「そう、か。俺もあんな風に……」

「ん？ ああ、それ違うわよ」

「……は？」

あっけらかんと言う夕輝に育沙は別の意味で頭が真っ白になる。

「姿かたちが変わるわけじゃ無いわよ。何て言うの。特殊能力？
そう言うのが付くだけよ」

「特殊……能力？」

「うん。感染獣はそれぞれおかしな力を持ってる。育沙を襲ったのは風系統のヤツだから風の力を使うことが出来るはずだけど」

そう言われて育沙は怪我をした右手を見る。

つまり感染とはその能力を感染させること。だからこそあのウルフ系から育沙は異物を感染させられたのだ。

しかし育沙はココまで聞いて新たな疑問がわいて来る。

「なら何であの怪物を倒したんだよ？ 倒さないでその能力を人間に感染させたらいいじゃねえか？ その方が倒しやすくなるだろ」

そう。見つけるたびに倒していたらあの感染獣に対抗する術を自ら消していつているものだ。一匹につき一回なら分かるが先程アオが増殖力の話をしていた事からそんな事は無いと簡単に想像できる。能力に強弱があれば話は別だが、それでもないよりある方が良いに決まっている。

その疑問に答えたのは柚瑠だった。

「それは無理なのですよ。コチラでも一度能力……私たちは接触コネクと呼んでいるですが、摘出しようとするとその感染菌は死滅してしまいます。どうにも無理に引き剥がすとダメみたいなのです」

「それに、育沙はどう思ってるのか分からないけど、感染獣に襲われて傷一つで済むこと自体が奇跡に近いのよ。そもそも感染したら体が細胞変化して高熱がでるし、まともに動けなくなるからね」

「それに人間、いざ自分の目の前に現実離れしたものが現れるとそれに恐怖や嫌悪感を持つものです。事実、アオさんの世界では接触コタ者……能力を持った人の事ですけど、差別意識を持った人も居ます」

確かに育沙は腕を怪我したときに意識が朦朧としていた。アレはコネクトのせいで体の変化を起こしていた証拠だったのだ。

そもそもアオが来るのが少しでも遅れていれば育沙は確実にあの感染獣に食い殺されていた。確かに腕一つの怪我で済んだのが奇跡に近かった。

「だからこそ接触者^{コネクター}の数は恐ろしく少ないです。まあ、部隊で重宝しているのも事実ですが……」

「で、俺にソコまで説明するって事は、部隊への勧誘が目的ってことですか？」

「あら。察しが良いわね」

やはり、と思う。

今聞いてきた事は明らかに育沙の様な一般人に話して良い事ではない。それが例え被害者だったとしても。それを喋ってきたのだから勧誘と考えて当然だろう。

しかし実際アオ達は勧誘できれば良いか、と思っていた程度で本当は育沙に自分の置かれた状況を正確に伝え、能力の事を話すのが一番の理由だった。

「ま、今すぐ入れ、とは言わないわよ。キミにだって人生があるし夢だって有るだろうしね。ただコネクトの使い方だけは知っておいて欲しいの」

能力は人間が本来持つ力では無い為に、油断すれば制御できなくなり、他人や自身を関係なく巻き込み、最悪死に至らしめる。それを防ぐためにも使い方を知るのは必要最低限の事だった。

「まあその辺りは願っても無い事ですが……」

「よし。なら決まりね。柚瑠、育沙君の体調は？」

「良好なのです。明日には普段どおり動けますよ」

「なら明日早速行くわよ」

「ちょ、ちょっと待ってください！良くなって何処に！？」

話が勝手に進むことに育沙は言葉を挟む。明日は学校があるし、そもそも行き成り話を進められては溜まったものじゃない。まず親への説明はどうするのか。育沙はこの世で一番怖いものは母親なのだ。次に夕輝。

「あ、それは大丈夫よ。育沙、私と旅行してる事になってるから」

さらりと爆弾発言の夕輝。

「よく親が許し……そうだけど、もっとマシな理由無かったのかよ！？」

夕輝とは長い付き合いの為お互い親同士そう言う事には寛容なのだ。今更二人きりになったとしても、間違いが起きるわけも無い。間違いを起こすなら夕輝の方だ。と育沙には喜んで良いのか分からない方向に信用されているのだ。

まあ、お互いの親が万が一間違いが起きてもそれはそれで有りだ、と思っていることに当人たちは知らない。

「よし。手回しは十分ね。これで少しはゆっくり出来るかしら」

「あの……ですから何処に行くんですか？」

胸の辺りで握り拳を作っているアオに育沙は一抹の不安を覚えながら尋ねる。行く、という表現をしている以上、ここやこの近くという訳では無いだろう。場所を聞いても地名など分かるわけでもないが名前くらいは聞いておきたいものなのだ。

「ナルフィア。私の世界よ」

03. 接触者（後書き）

こんにちは、八神煌斗です。

今回は完璧に説明回になっています。

これで多少はこの小説の世界観を知ってもらえれば、と。

細かい事は今後もう少しずつ出して行きますが、この話の核となる設定は全部出せたかと。

因みに今回出てきた水河柚瑠は九浄 夕さんからいただいたキャラクターです。

上手く動かせたかな？

それでは皆さん次回でお会いしましょう。
ではまた！

04. ナルフィア

「これがリング。コレを使ってナルフィアに行くわよ」

育沙の前にあるのは横に置かれた金色の装置。リングという名前だから綺麗でスマートなものを想像していたのだが、実際はあちこち繋ぎ目が見え、サイズも人間が三、四人ほどが一度に入れるような大きなものだった。

「無効には一瞬で付きます。では育沙さんにアオさんのお二人はリングの中に入ってください」

「あれ？ 夕輝たちは来ねえの？」

今柚瑠は夕輝と自分の事を言わなかった。二人共付いてくると思ってただけに、来ないというのはそれだけで不思議に思わせた。

しかし夕輝はそんな育沙に対して心底呆れた顔を向けた。

「……なんだよ？」

「あのねえ、いくら感染獣があんまり現れないって言っても完全に出ないわけじゃないのよ？なのにコッチをカラッポにする訳に行かないでしょうが」

「む……。でも、コッチに居るの他にも居ただろ？」

リングのある部屋に来るまでに何人かの人間とすれ違った。女性ばかりだったのが気になったが、聞けばベガは女性が一番多い部隊と言うことも既に聞いていた。別に夕輝たちが居なくなったところでソレほど影響は無いと思った育沙だったが……。

「それにさっきコネクターの数は少ないとも言ったでしょ。それでアオさんだけじゃなく私まで抜けるわけにいかないでしょう」

「ああ、そういう……って、お前もコネクターなのか!？」

サラっと言われた夕輝の爆弾発言に驚く育沙。夕輝がこちらの隊員なのは既に雰囲気で見分けていたが、まさかコネクターだとは思っては居なかった。

「そうよ。大体三年前だったかな。スネクター蛇型にやられてね。今じゃこの通りよ」

そう言って右足首を持ちそのまま自分の右太ももに持っていた。膝が有り得ない方向に曲がっている。かなりショッキングな光景だ。それだけで育沙は言葉を失った。と同時に育沙の中で全てが繋がった。

夕輝が三年前に足を怪我したというのはこの事だったのだろう。徐々に馬鹿になって言ったのも、コチラの仕事が増え勉強する時間が減ったと言う事だ。実際それも正解だが、もう一つの理由として

単純に勉強についていけなくなったというのもあるのだが、それは知らないのがお互いの為だろう。

「話をついた？　そろそろ準備も出来るわよ」

いつの間にかアオはリングの中心部分に立っていた。それを見て育沙を慌ててアオの隣に駆け寄る。育沙が横に来たことを確認したアオは柚瑠に向かって指示をする。

おそらくこのリングに関する指示をしているのだろうが、育沙には全く分からない。なにせ専門用語が多すぎるのだ。それだけでなく座標や磁場、圧力の数値が二人の間で飛び交っている。

ふと気になって夕輝を見ても、頭から煙を出しそうなほど、柚瑠の横で必死になってモニターを覗いている。どうも夕輝にも理解は出来ておらず、それだけでこのリングは操作できる人間に限られていると育沙は理解した。

「アオさん行けます！　衝撃に備えてください！」

「よし！　いつでも来なさい！」

「え、ちょ？　衝撃ってなに――」

さらりと交わされた何気に恐ろしげな単語。その事にツツコミを入れようとしたその刹那、育沙の視界は一瞬で白に染まり、意識が跳んだ。

「相変わらず、この光どうにかならないの？」

「ゆずに言われても困るのです。作ったのゆずじゃないですし」

誰も居なくなったりリング上を見つめ少し会話をした後、二人は部屋を後にしていった。

「ぎもぢわるい……」

「衝撃に備えてって、柚瑠が言ってたでしょ？」

「ならまず備え方を教えて欲しかったですけどね！？ ……うえ」

視界から白が消えたとき、育沙は辺りの変化よりもまず自身の体に起きた異変の方に意識が集中していた。体の中身だけをシェイクされたような、全て絞られた様な感覚に襲われているのだ。それで居て吐き気がするのに、吐き出せそうな気配は一向に無い。これではただの生殺しだと育沙は内心で罵った。

数分後、ようやく不快感が消えてきた育沙は改めて辺りを見る。さっきまで居たところは漫画や小説に出てきそうな研究所だった。あちこちに大小のコードが乱雑に並べられており、最低限の掃除はしていた様だが、部屋に入ったときに感じた埃っぽさは細かいところまでは掃除が出来ていないと直ぐに分かった。

しかしどうか。今現在居る部屋は空気が違う。埃っぽさは全く無いし、そもそもコードも何処にも見当たらない。有っても細いコー

ドが壁や床に伸び、最低限の長さしか見えないようになっている。

「本当に……跳んだ？」

分かっていることだったが、口に出してしまう。それが無意識のうちに自分に言い聞かせる為だったとは、育沙は気づかなかった。

「とにかく行くわよ。連絡もまともに居れずに来たっただし」

「大丈夫なのかよ、それ……」

「なにか言った？」

「いいえ、なにも」

ここ、ナルフィアに来ると言われたのは昨日だった。確かに夜だったが、それでも出発したのは昼。手段があるかは知らなかったが、今の発言を聞くに出来るらしい。

初対面の時はその容姿と風景の為に見惚れていた育沙だったが、経った一日も経たないうちに育沙は自分の中では色々なものが音を立てて次々に崩れ去っていくのを感じていた。

部屋を出でると、嫌でも世界が変わったことを思い知らされた。^{むしう}日本の廊下はお屋敷の様な、そんな雰囲気だった。実際育沙が居たところは古い屋敷なのだが、廊下の絨毯などは全て外されており、木の板はむき出しの状態だった。それに掃除もしてはいるのだが、いかなせん広かった。あの屋敷の広さに対してそこに勤めている人間は少ない。皐月市に感染獣が現れた場合の為に派遣されたモノた

ちが居るのだが、だからと言って元凶が居る世界を手薄にしては何の意味も無い。だからこそ、皐月市に居る隊員の数は最低限である。その為に掃除まで手が回っていないのだ。

しかしナルフィア（こちら）は掃除云々の前にその景色が違った。日本では屋敷風だったが、こちらは白で統一され、漫画などに出てくるSFのような趣がある。日本が木材で、ナルフィアが鉄、とても良いのだろうか。とにかく、世界を移動した事を確認するには調度良い。

しかし、と育沙は思う

掃除は行き届いてはいるのだが、なにか汚れている。そんな印象を受ける育沙。言うなれば部屋を丸く掃いたような。

「あ。アオさん、お久しぶりです」

「久しぶり」

「アオさん、また教導してください！」

「機会があったらね」

アオに連れられ、後ろを歩いていると、人とすれ違うたびに声をかけられている。だが、その相手に育沙は疑問を持った。

「なんて言うか、女の人ばかりですね」

そう。いままですれ違った人は皆女性ばかり。男も見なかったわけでは無いが一人か二人だけ。イメージでは男が多いと思っていただけに育沙に小さくない驚きを与えていた。

そんな育沙の疑問にアオは当然といわんばかりに返事をする。

「まあね。ウチの部隊、ベガブルーは女性が中心の部隊だから。特に募集をかけてる訳じゃないんだけどねえ。他は別にそんな事無いんだけど……」

最後の方は尻すぼみになっていたが、確かに聞こえた。しかしそれは育沙に新しい疑問を与えた。

「他って、ベガブルー（ここ）以外にも部隊が？」

「デネブレッドにアルタイルグリーン、あとはうちのベガブルー。この三つでこっちでは大三角って呼ばれてる」

デネブは大三角の中で一番巨大な部隊。しかしどこかエリート思考が見え隠れする。例外は存在するが極少数で、デネブ内では変人扱い。他の部隊との関わりも最小限である。

対するアルタイルは大三角中一番の少数部隊。しかし少数精鋭という言葉がもっとも合い、危険な任務などは一番率先して行っている。

と言うのが育沙が聞いた上での感想だ。

「さ、着いたわよ」

大三角について思考を巡らしていると、いつの間にか目的地に着

いていた。やはりここも他と変わらずどこか近未来的な特に装飾もされていない水色の扉があった。

近づくとも自動ドアだったようで、横にスライドした。

中は特に想像以上のモノでは無いな、と育沙は思う。白で統一されていて、身近にある光景では無いが、探せばどこかにあるような雰囲気。ドアと対面する壁に大きな窓があり、その前にデスクが置いてある。そこに一人の女性が座っていた。

アオよりも薄い色の淡い青の髪。それを右サイドポニーで纏めているが、後ろ髪も多少残している。おっとりした目をしているが、抜けているという印象は一切無かった。

「久しぶり」

「あのねえ、一応今は仕事中よ？」

「細かいこと気にしたら出世できないわよ」

「……これでも部隊長なんですけれど？」

アオの気軽な挨拶に女性は頭を抱え、呆れた様な態度をするがアオが気にした様子は無い。

女性もこれ以上言っても仕方ないと思っているのか追求はせずに話を進める。

「で、その子が新しいコネクター？」

「成美育沙。ちゃんと確認はしてないけど、風系統のコネクターね」

椅子から立ち上がり育沙に寄ってくる女性。そして質問に答えるアオ。その間育沙は何もせず立っているだけで何もしていない。

「始めまして。マリン・ベガです」

「ベガ？」

女性の自己紹介に育沙は首を傾げる。デネブは部隊名。その名前を持っていると言う事はこの女性、マリンが創始者なのだろうか？その疑問が浮かんた。

「デネブのトップになればね、織姫デネブの名前が与えられるのよ。本名は違うわよ」

「あ、そうなんですか？」

育沙の疑問にアオが答える。そうもその部隊のトップにはそれぞれ部隊の名前が与えられる。ベガは織姫、アルタイルは彦星。そしてデネブが白鳥。

その名前を持つことは名誉であり、死と隣り合わせ生活が始まることを意味する。

「って、名誉なのはわかりますけど、何でソレが死に繋がるんですか？」

「もしアナタが犯罪者で、その自分を捕まえようとしてる組織を

潰すに一番手っ取り早い方法は何だと思う？」

「……ああ、なるほど」

ベガブルーにどれだけの統率力があるのか今の育沙には分からないが、トップが消えれば多少の影響は出るだろう。地球ではトップを潰すとなればそれなりの準備、そして人手が必要だが、この世界ではコネクターが居る。単体で一人を殺する方法など、いくつもあるのだ。

「それでアオ。ココに連れてきたって事は、まさか……」

「そ。私が直々に鍛える」

「それはまた……何人が喜んで、何人が泣くのかしら」

気味の悪い笑い方をするアオと本気で頭を抱えるマリン。それらを見て何故かこの先が不安になる育沙だったが、その不安は的中することになる。

04. ナルフィア（後書き）

お久しぶりです、八神煌斗です。

中々物語が進みませんがスミマセン。

やはりオリジナルになると説明が多くなってしまいます……。

今回は大三角と夕輝のコネクター発覚。

夕輝は右足だけ軟体動物に近いと思っていただければ。

ぶっちゃけ役に立つのか分からない能力ですが、まあ、こんなのも有って良いのでは無いでしょうか。

今回はようやく物語が動き始めます。

とは言え、育沙の修行辺ですかね。何もやっていない普通の高校生ですし。

ではまた！

05. アオの訓練

小さなドーム。それが育沙の最初の感想だった。天井は円を描くように丸みを帯びていて、部屋の形も円になっている。未だにナルフィアに来て施設から出ていないのでなんともいえないが、このドーム状の部屋だけでどれだけ巨大なのか、気にもなった。

しかし、今はそんな事どうでもよかった。

「ほら、さっさと能力出コネクトしなさい！」

「んなこと出来るかああああー！！」

アオの鬼指導により育沙、命の危機に晒されている。割とリアルに。

アオは大三角の中でも有数の能力者であると同時に、名の通った教導官でもあった。しかし、内容は優しくは無い。本人を限界ギリギリまで追い込み、限界値の底上げを図る。スキルアップでは無くメンタルアップ。

無理と考えればその時点で死ぬ。今のナルフィアはソレほどにまで切迫しているからこそ教導スタイル。不満を言えば二割増し、無理だと言えば五割増し。されど本気で逃げ出し、投げ出したものは追わない。それがアオの教導スタイル。そこで逃げ出した者達がつけた二つ名が『アオ鬼』。本人は了承していないが、裏ではアオ

よりもそちらの名が通っている。

「つかまず、能力^{コネクト}の出し方教えろおお!!」

「んなもの自分で考えなさい!」

「アホかああブヘラッ!?!」

育沙を襲っているのはアオが撃ち出すゴム弾。しかしゴムとは言え当たれば痛みを伴い、当たり所が悪ければ意識を刈り取られる。訓練が始まって五分。育沙の体には既にいくつモノ瘡が出来上がっている。

アオが育沙にこの訓練で求めたのはただ一つ。

——能力^{コネクト}と使用してゴム弾を防げ

コネクターならばゴム弾を防ぐ程度造作もないことだが、育沙は文字通り昨日コネクトを手に入れたのだ。どう防ぐか以前に、自分の能力がどういうものか全く分からない。スパルタにも程がある。

「言ったでしょ。コネクトの使用方法是その人によって変わる。私が教えたところで意味は無いのよ」

足に弾を受け、倒れている育沙の元にアオが寄り、話しかけてくる。うつ伏せだった育沙は右足を擦りながら状態を起こす。

「っても何か有るでしょう？ さすがにノーヒントで常識外の問題出されても、手の着けようがないですって」

育沙の言う事はもっともだった。つい先日までコネクターや感染獣を知らなかった育沙にはコネクトの使用方法など一切思いつかない。他人のコネクトにしても夕輝の右足がおかしな方向に曲がるのを見ただけだ。それも夕輝は呼吸をするように、当たり前のようにいとも簡単に見せたのだ。

それではどうしようもなかった。

「そう言えばアオさんのコネクトって何なんですか？」

それは単純な興味だった。

「私？ 私のは『高速行動』^{クイック}だけど……見せるのはまた機会があったらね」

「む……。出し惜しみですか？」

「違うわよ。私のクイックは少し異色でね。出すとビックリするくらい疲れるのよ」

「疲れて……コネクトを使ったらそんなに疲れるのもなんですか？」

コネクトを持っていたとしても使ったことのない育沙にはそれがどの程度のものなのか全く想像が出来ない。確かにコネクトと言う異能力には小さい頃憧れがあった。それはテレビのモニターの向こうで活躍していた正義の味方。特殊能力を使って悪者を倒していくさまには何度目を輝かせたか分からない。

すでに育沙の中でアオはとんでも人間に認定されている。そのアオが疲れると言うからには、自分が使えばどうなるのか不安になったのだ。

「ああ、多分育沙が使っても私みたいには疲れないわよ？そりゃ、全く影響ない訳じゃないでしょうけど」

「ん？アオさんのが特別ってことですか？」

「そうなるかしら」

両手に持っていた拳銃を両足のホルスターにしまい、腕を組むアオ。どうやら少しだが休憩に入ったようだった。

それに小さく息を吐き、ホッとする育沙。

「コネクトは本来傷つけられた部位から発現させるんだけど、私の場合少し特殊だね。ソニックウルフ速狼に右肩をやられた時、風邪をこじらせたのよ」

「か、風邪？」

「そう。それでコネクトが全身に回って……全身でコネクトを使えるビツクリ人間になったらしいのよねえ」

「全身って……それ、今まで聞いてた話だとありえないんですけ

ど?」

「そうは言ってもねえ。そう聞いてるし、実際そうなんだし……」

頭をかき、視線をずらしながら答えるアオ。自分でも言っていたようにどれだけ異常な状態か把握しているようだ。

「私の事は良いのよ。ほら、休憩終わり。再開するわよ!」

「はやっ!?!」

育沙の訓練はまだまだ続く。

「ふう……」

マリンは椅子に体重を預け、天井を仰いだ。

先程回ってきた案件。それにどう対処しているモノか、それについて頭を痛めている。

義賊、と言えば聞こえは良いのかも知れないがやっていることは盗賊行為。認められる訳が無い。しかしその行為で救われている人間が居るのも確か。

大三角が生活を守る為に作られたと言っても、基本は感染獣の討

伐をが大原則。貧困に悩む人々にまで手が回っていない。

だからこそ今までは放っておいた。被害にあっているのはいずれも裕福で、汚い人間ばかり。苦情は何度もきたがマリンが何とか収めてきた。

しかし最近、その他称義賊の動きが変わってきている。裕福貧困を問わずにただ自身の為に人を襲い、奪っていく。ただの盗賊に成り下がった。

公には否定しても、心中ではその行為に賞賛を与えていた身としては落胆の前に何故、という疑問があった。

「どうしたものかしらねえ」

既に動いてその義賊、エンキの捕縛の為に何度か部隊を動かしたが、ことごとく全滅。

死者こそ出ては居ないが、時間の問題だろう。早急に手を打ちたい所だがそれではベガの被害が増えるだけ。

今のエンキを止められる人物が今のベガブルーには――……

「あ、居た」

一人いる事、正確には戻ってきている人間を思い出し、マリンは早速端末を開いた。

「畜生がああああ!!」

「おっ」

叫んだ育沙が右手を前にしたとき、ゴム弾が微かに軌道を変えた。

「いでっ!？」

結果、アオが当たると思った場所より少しずれて育沙に命中した。
育沙はゴム弾の威力に負け、その場に倒れこんだ。

「発現、って言うにはまだまだだけど、一応初日って事を考えれば合格かしら」

アオの目は確かに育沙がコネクトを発現させたことを確認した。
コネクトと言うにはまだまだ微弱で、ゴム弾とは言え、軌道を逸らしたのだ。これをコネクトと言わずに何と言うのか。

「……………」

アオが感心するなか、育沙は仰向けのまま自身の右手を見る。

弾が自身に近づいてきていたとき、咄嗟に出した右手。あの瞬間、確かに自分の中で何かが弾けだした。しかし右手から弾けたのではなく、心臓から右手と言う出口に向かって、という表現が正しい。

やっと掴めた。

育沙は無意識のうちに笑みを浮かべ、その手を握り締めた。

「さて、今日はこのくらいで——……」

「アオさん!!」

「ん？」

「もう一回、もう一回だけお願いします!」

今日は終わろう、と言おうとした矢先、育沙が起き上がりそう進言した。育沙としては一日をほぼ使い切る形でようやく掴んだコネクトの片鱗。今のうちにこれを確固たるモノにしたかった。

既に体力精神力共に付きかけてるだろうと思っていたアオは面を食らった。実際その考えは肩で息をしている所を見れば間違っではないのだが、そこから更に進もうとしている育沙をアオは留める気にはなれなかった。

そう、これこそアオが目指す精神的な鍛錬。本来目指しているも

のとは少し違うが、自分の限界を超えようとしている所は見所があった。

育沙は知らない。メンタルアップを目指すアオの鍛錬は逃げ出すものが多い。しかし、食らいついた者は間違いなく、実力を付け生存率が他の教導を受けた者に比べ段違いに高いことを。

「ようし、ソコまで言うならやってあげようじゃない。……死なないでよ？」

「ありが……死!？」

最後に恐ろしい言葉が聞こえた気がして止めようとするが、時既に遅し。育沙の目の前には良い笑顔を浮かべたアオが銃口を向けていた。

「死ねエエエエ!!」

「聞き間違いじゃなかったああああ!!!!?」

そして襲い掛かるゴム弾の群れ。バンドガン一丁でなぜアレだけの連射が出来るのか、気にはなるがそんな事に気を止めていたら次の瞬間には体中にゴム弾を受けて横たわっていることに間違いない。

育沙はあちこち悲鳴を上げる体にムチを打ち、飛び込む様に左に避けた。

「避けるのは良いけど、何の為に延長したのか分かってるわよね！？」

分かってはいるが、集中が出来ない。それが率直な育沙の意見だった。さっき掴んだ感覚は確かなもの。しかし一日中見てきたとは言え弾を避けながらも一度同じ事を直ぐにやることは無理があった。

——いや、違う。

無理、という言葉が頭を過ぎった時、自分でそれを否定する。

自分で続行を望んだのだ。再開して直ぐに諦めていては本末転倒。育沙は思考を切り替え、再び自身の心臓へと意識を向ける。

「むっ」

育沙の面構えが変わったことをアオは見逃さない。今まで何百人と教導してきたアオにはその変化がどれだけ小さなものでも見つけることが出来た。

アレは、腹を括った者の目だった。

小さく足に力を入れ、万が一の時に備える。育沙の力は風。コネ

クトを使用された際に飛ばされましたでは笑いものも良いところだ。

そしてほんの少し、弾を打ち出す感覚を短くした。それは育沙に集中するヒマを与えないためだった。もし再びナニカに襲われた際、相手は待ってくれない。呼吸をするように、歩くように。意識せずに発動できなければコネクトは意味が無い。

しかし、そのアオの策略が無くとも、育沙は集中を切らさずに思考を更に深いところへと沈めて行った。

——さっきの感覚……心臓から右手に向けて一本の道を……。

弾が当たる。しかし、育沙は先程までの悲鳴を出さない。出している余裕など無い。

——打ち出す。息を吐き出すように……自分の手から吐き出すように……風を！

「吐き出せ!!」

「っ!!」

振るった右手から風が舞う。それは先程のゴム弾の軌道を少し逸らす程度の生易しいものではなかった。

暴風。

辺りに転がっていた弾を含め、銃から離れた弾たちが舞い上がり、アオ達の髪を巻き上げる。

「ちょ、いくら追い込んだからって……初日でコレ!？」

アオも驚きを隠せずに叫ぶ。精々少し強い風が吹く程度だと思っていたところでコレだ。小さな台風と言えば良いのだろうか。育沙の右腕を発生源とし、今もまだ風が生み出され続けている。

これは、とてつもない原石を見つけたかしら。

アオの顔に笑みが浮かぶ。

しかし……。

「ん？ 生み出され続けてる？」

頭に疑問が浮かび、次の瞬間焦りに変わった。

「育沙! アンタ風を止めなさい! 本当に死ぬわよ!?!」
「んなこと言ったって……どうやって止めんだよ!?!」

さすがの育沙もこの状況はマズイと感じたのか焦り、アオに敬語を使う余裕すらなくなった。

風……コネクトを使い続けたら、死ぬ。コネクトがナニを元に使って発生しているのかは正確には解明されていないが、体力を使う事はハッキリしている。

過度な運動は体に害しか与えない。それ以上に過度に使いすぎて廃人になった人間をアオは何人も見てきた。このままでは育沙は死ぬ。

「ちっ。痛くてもガマンしなさいよ！」

アオが叫ぶ。

そして次の刹那、育沙の視界に居たアオが消え、育沙の意識は闇に沈んだ。

「まさか、^{クイック}高速行動を使うハメになるなんてねえ……」

倒れた育沙の後ろに座り込んだアオが誰に告げるでもなくつぶやいた。

あの状態の育沙を止めるには意識を刈り取るしかなかった。しかしあの暴風。普通に走って近づこうとしても無理な事は目に見えていた。だからこそそのコネクト使用。

育沙の後ろに回りこみ、自身のハンドガンで頭を一発。少々荒療治になってしまったが、ケツカオーライと割り切るアオ。

「しかしまあ、しばらくは私も休憩かな」

アオの高速行動は全身で使えるという利点があるが、それに準じて不備も有った。それが使用後の筋肉疲労。使った部位、時間に比例して筋肉に痛みが走るのだ。簡単に言えば筋肉痛だ。

非常時で有った為に、焦って全身で使用した為に全身筋肉痛のよくな状態になっていた。

今までの経験で完全回復までには3分ほどだろう、と結論付けその場に大の字になって寝転んだ。

アオの端末がなったのはそんな時だった。

05. アオの訓練（後書き）

お久しぶりです、八神煌斗です。

今回は育沙の覚醒、およびアオの能力解説を少し。

育沙にいたっては能力が制御できずに悩んでもらいます。今の状態で使えば死ぬという、最悪な状態からのスタート。特に強い力でもないのに死が付きまとうと言う状態で頑張ってもらいます。

アオのちゃんとしたコネクト使用についてはまたいづれ。

ではまたっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3233w/>

アオの織姫

2011年10月11日01時49分発行